

「ゼロ照応」の日中対照

—— 主題化との関連で ——

今 井 敬 子

目 次

はじめに

1 連続性の条件

1-1 意味文脈と接続 その1

1-2 意味文脈と接続 その2

2 視点の条件

2-1 受動句とゼロ照応

2-2 異視点交錯の構造

2-3 視点人物と談話主題

おわりに

はじめに

文の集まりがテキストを構成するとき、テキスト内の文は互いにばらばらな情報を表すままに羅列されているのではなく、隣接する文と文は情報の連続性によって緊密にむすばれている。先行する文によって与えられた情報が、後続する文にうけわたされ、そこで新たな情報が加えられて、さらに後続する文にうけわたされる、というふうに、伝達される情報をいわば“結び目”として文の連鎖が形成され、その展開の全体がひとつの整合体としてのテキストとして実現する。

情報は、そのままの形で反復されるよりもむしろ、より経済的な手段が選ばれるが、照応は、そのような文法的手段のひとつとして捉えることができる。照応は、先行詞と、それによって示される意味内容をより簡潔な形でうけつぐ照応詞との組み合わせで構成されるが、照応詞にゼロ形式が用いられる場合がゼロ照応 (zero anaphora) である。

ゼロ照応は中国語と日本語にも広範に見られるが、必ずしもおなじようなあらわれ方をするわけではない。小論では、後続する句の主題についてゼロ形式が用いられている場合について特にとりあげ、中国語と日本語の用例を対照する方法で、両言語におけるゼロ照応の条件について考察を加える。ゼロ照応は、言語的な意味文脈および構造文脈にも依存する書かれた文章と、それらだけでなく、発話場面、発話の状況などの言語外の文脈への依存度の高い会話、対話等とは、自ずからその条件を異にするが、小論では前者を対象とし、両言語における情報の連続性を保証する仕組みの異同に関心の中心を置きながら考察を進めてみたい。

1 連続性の条件

ゼロ照応が成立するための条件について、陳 (1987) は、先行詞が後続句にたいして持つ

連続性（＝啓後性）と、照応詞が先行句に対してもつ継続性（＝承前性）がいずれも強いほどゼロ照応の成立を容易にすると論じている。先行詞の啓後性および照応詞の承前性の強弱の度合いは、先行詞と照応詞がいかなる文成分として用いられているかによるとし、文成分によって、継続性の強弱に差が見られることを指摘している。陳の調査によると、中国語では最も強い啓後性を持つ先行詞は①主語であり、そのほかに②存現動詞に後置される名詞成分および③他動詞の目的語があげられる。また、照応詞については、最も強い承前性を持つのは、④主語、次いで⑤他動詞の目的語という結果がみられる、という。すなわち、①②③を先行詞とするゼロ照応が成立しやすく、かつ、ゼロ表示される照応詞は文中の④⑤の位置におこりやすい、ということになる¹⁾。Shi (1989) でも小さな差異を別にすると同様の条件が挙げられている。本節では、①②③が先行詞となって後続句の④の位置においてゼロ照応が見られる場合について、中国文とその日本語を主な材料とし、両者を比較対照しながら順次検討してゆく。

まず、①については日本語でもゼロ照応がよく見られる。また、②は文中の主語の位置には立たないが、論理上の主格主語であり、これは、日本語では「が」格で受ける主語のゼロ照応として、やはりよく見られる。

(1)(2)はそれぞれ①②に相当する陳(1987)の挙例およびその日本語である²⁾。

(1) 他_i 擦車, ϕ_i 打气, ϕ_i 晒雨布, ϕ_i 抹油。

(1-a) 彼_i は自転車を拭いて, ϕ_i 空気を入れ, ϕ_i 雨覆いを陽に干して, ϕ_i 油をさす。

(2) 来了一批作家_i, ϕ_i 発動社員写詩歌。接着又来了一批画家_j, ϕ_j 教給社員作画。

(2-a) 一群れの作家_i が来て, ϕ_i 公社員に詩をつくるよう勧めた。続いて画家の一群_j も来て, ϕ_j 公社員に絵を描くことを教えた。

(1), (2)では中国語と日本語とでともにゼロ照応が成立し、たがいにはほぼ対応した文となっている。

1-1 意味文脈と接続 その1

先行詞が③の場合には、同一句中に主語と、動詞の目的語とのふたつの名詞成分が存在するが目的語の啓後性の方がより強い場合、と理解できる。したがって、文法成分の違いによる啓後性の条件に優先されるような何らかの別の条件がはたらいっているはずである。Shi (1989) の挙例(3)(4)と、その下に付した日本語について検討してみたい。

(3) 李四買了一只狗_i, ϕ_i 只是乱叫。

(3-a) 李四は犬_i を買ったが, ϕ_i やたらにほえてばかりいる。

(4) 李四_j 買了一只狗_i, ϕ_i 逃走了。

(4-a) 李四は犬_i を買ったが, ϕ_i 逃げてしまった。

(4-b) 李四_j は犬を買って, ϕ_i 逃げてしまった。

(3)の第一句には「李四」と「一只狗」のふたつの名詞成分があるが、第二句のゼロ照応は「一只狗」について成立している。Shi はこれを、ゼロ主題の解説部分「只是乱叫」が「一只狗」についての解説でありうるが、「李四」についての説明ではありえないという、語彙の意味関係によって規定される意味文脈から論証している。すなわち、意味文脈のほうが先行詞となっている文成分の持つ啓後性よりも優先条件であることになる。(3)の日本語

でも同様の理由でゼロ照応が成立している、とひとまず考えてよいであろう。

これに対して(4)が文脈の助けがないかぎりアンビギュアスであるのは、第二句の「逃走了」が第一句の「李四」、「一只拘」のどちらについての解説ともなりうるためである。ここでも意味文脈が文法成分間の啓後性の強弱に優先する。ところが(4)に対応する日本訳は、たとえば(4-a)(4-b)の訳例のように、ふたつの分句の意味関係を異なった接続形式((4-a)「一が」、(4-b)「一て」)で表し分けることによって、「一只拘」、「李四」のどちらについてのゼロ照応であるかが明確にわかるような文として示されている。中国語では、句と句がただ並列されることでつながるかたちが接続の基本構造であり、とくに接続作用のある語や形式を必要としない場合が多いこと、そのため文や文章の理解のうえで意味文脈への依存度が高いことはよく知られている³⁾。これに対して、日本語には豊富な接続形式が存在し、その使い分けによって(4)に対する日訳文が一義性を保てることは中国語との大きな差である。

したがって、(3)の日本訳の場合も、語彙的な意味関係だけでなく、それとあわせて、接続の形もまた意味伝達的手段として機能していると理解すべきである。(3)(4)の日本訳では、意味文脈と接続作用のふたつの手段が矛盾なく適正にはたらいっているために適格な文となっていると理解される。

1-2 意味文脈と接続 その2

上の例とは違って、中国語の原文に対応する文として訳出できない場合がみられる。(5)は藤堂(1985)からの引用例である。

(5) 我国政府派遣了遣唐使節_i, ϕ_1 渡過大海, ϕ_1 訪問了長安。

(5-a)* 我国の政府は遣唐使_iを派遣し, ϕ_1 大海原をのりこえ, ϕ_1 長安を訪問した。

(5)では第2, 第3句が表す内容「渡過大海」、「訪問了長安」は第1句の「我国政府」ではなく「遣唐使節」についての説明である。

(5)の文は、藤堂も述べているように、つぎのA, Bふたつの命題が、その共通部分(アンダーラインの部分)をいわば“くさび”としてひとつに結合することによって生成されている⁴⁾。

- A 我国政府派遣了遣唐使節。
- A' 我国の政府は遣唐使を派遣した。
- B 他門渡過大海, 訪問了長安。
- B' 彼らは大海原をのりこえ, 長安を訪問した。

日本訳の場合もうえのふたつの命題が結び付けられることで訳文が生成される、という点で同様であろう。ところが、A'とB'を結び付けるかたちでできている日本訳(5-a)は「遣唐使」をゼロ照応させる文とはなっていない。原文の文意をそこなわず、かつ日本語として成文とするためには、たとえば、以下の藤堂訳のような文としなければならない。

(5-b) 我が国の政府_iは遣唐使_iを派遣し, ϕ_1 {_(a)大海原をのりこえ, _(b)長安を訪問} させた。

使役動詞「させた」を用いて成文とした上の訳は、第2, 3句のゼロ主語が使役の主体である「我が国の政府」を指示すると理解するか、あるいはその内部にはめ込まれた「遣唐使」についてもゼロ照応が成立していて二重構造の照応関係がみられる、とするかであろう。

いずれにしても、中国語原文のように「遣唐使節」だけをゼロ照応させるような日本文は生成できない。

つぎの(6)は日本文とそれに対応する中国訳であるが、(5)の場合と併行した対比が見られる。

(6) 午前中に、鏡史郎₁は看護婦に連れられて、 ϕ_1 第一内科という札のかかっている部屋に行き、そこで ϕ_1 若い医師の診察を受けた。(井上靖『夜の声』)

(6-a) 上午，護士領着鏡史郎₁， ϕ_1 到一個牌子上標着第一內科的房間去， ϕ_1 接受一位年輕醫生的診斷。(文浩若等訳『夜声』上海訳文出版社)

(6)の日本文では、第1句の主語「鏡史郎」が後続するすべての分句にゼロ主語として引き継がれていて、文全体が、「鏡史郎」を主題主語とした連鎖を形成し、一貫して「鏡史郎」の視点に立った記述となっている。一方、中国語では第一句が「護士」を主語とする能動句に訳出されているが、これは中国語では受動文の使用制約が厳しく、句中の「連れて＝領着」という動詞が受動化の条件を備えていないためである⁵⁾。すなわち、中国文では第1句を受動句のかたちにして始めることができない。第2句のゼロ主題は第1句中の動詞の目的語「鏡史郎」に照応している。この中国訳について忠実な日本語を試みてみると、たとえば以下のようなろう。

(6-b) ?午前中に、看護婦が鏡史郎₁を連れて ϕ_1 第一内科という札のかかっている部屋に行き、そこで ϕ_1 若い医師の診察を受けた。

意味文脈から、第2, 3句は「看護婦」ではなく患者である「鏡史郎」についての記述であることは明かである。しかし、接続と文構造からみると、第2, 3句のゼロ主題が「鏡史郎」に照応していると理解することはできない。

(6-b)は訳文(5-a)と同じ理由によって適格文となれない。

つぎの(7)と(8)は、いわば条件付きで日本語訳においてもゼロ照応が成立するような、中間的な例である。

(7) 我₁上星期給大華飯店写了一封信， ϕ_1 請他們₁保留一間屋子，到現在 ϕ_1 還沒通知我。
(L & T 1981)

(7-a) わたし₁は先週大華ホテルに手紙を書いて、 ϕ_1 部屋をとっておいてくれるよう彼ら₁(ホテルの係り)にたのんだが、今になっても ϕ_1 連絡してこない。

中国文で、第三句のゼロ照応は、第二句の動詞「請」の目的語「他們」について成立している。日本語でも同様のゼロ照応が成立するが、ただし、第3句を中国語の原文に即して「他們」の立場に立ち、たとえば「……私に連絡していない」と訳したばあい、自然な日本語とは言いがたいであろう。上の訳例では、「……連絡してこない」と、第1句の主語「わたし」の視点からの表現を用いて訳出することによって、自然な日本文になっている。すなわち、第三句を第一句の主語「わたし」の視点からの記述に変え、全文の視点が「わたし」で統一されている。

つぎの(8)では、第1句の主語「欧有旺」は、主題の条件を十分満たしているが⁶⁾、「は」でうけるのではなく、「が」でうけ、第1句を条件句と理解すると、第2句のゼロ照応が成立しやすくなる。

(8) 欧有旺続了離婚的“活人妻₁”， ϕ_1 帶過來一大車東西。(陳1987)

(8-a) 旺有旺が離婚している“重婚婦人”を後妻にしたところ、の車**い**っぱいの荷物を持ってやってきた。

以上のように、中国語で動詞の目的語が先行詞となって、後続句の主語の位置でゼロ照応するとき、これに対応する日本語文について整理すると、以下のように分類される。

- i 日本語でもゼロ主題となり、中・日両語でほぼ対応する文ができる。例(3-a)(4-a)
- ii 日本語でもゼロ主題化できるが付帯条件が必要。例(7-a), (8-a)
- iii 日本語ではゼロ主題化できない。主語統一によって適格な日本文となる。例(5-b) (6)

この3つのタイプは、野田(1986)による「は」と「が」の係りかたと分句の接続関係との間にみられる3つのタイプに大体のところで対応する。両者をつきあわせたものが次の表であるが、表中の右部分に野田の分類をやや簡略化して示してある。

異主題のゼロ指示	タイプ	例文 No.	接続形式 (例)	「は」と「が」の作用範囲
可	i	(3-a), (4-a)	が, けれど, のに, から	別の主語(ゼロ主語を含む)があらわれるまで係りつづける。
条件つき可	ii	(7-a)		
		(8-a)	と(条件), とき, ても	「が」は従属節内のみ, 「は」は文末まで係る。
不可	iii	(5-b), (6)	て, ながら, し	文末まで係る。

このように、日本語では分句間の意味関係によって、第1句の主語の及ぶ射程がちがってくるため、異主題の現れやすさの程度によって、ゼロ照応が成立したり、しにくかったりする。一方、中国語はそのような日本語における条件が制約とはならないことが表からわかる。

2 視点の条件

日本語におけるゼロ照応については、久野(1979, 1982)が視点論の立場からとりあげ、先行句の事項が後続句でゼロ指示される場合の条件として、ふたつの文の間に視点の一貫性が存在することが必要である、としている。(7)の日本語訳は先に述べたように、視点の統一をはかることによって成文となっている。また、(5)における使役形式の使用、(6)の受け身文もまた、視点が統一された文を成立させている。これらの例はいずれも何らかの視点統一のための操作をおこなうことによって、自然な日本文となっている。

寺倉(1986)はこれにたいして、視点条件だけでは説明しえない反証例を上げ、隣接する2文が、その間に意味的断絶が存在しないような「継続文」であることが条件である、とする。前節の適格な日本文は、すべてこの条件をみたしている。また、中国語例文も、同様に継続文の条件を満たしている。

継続性の条件については、Li & Thom pson (1979)が、『水滸』を言語資料として調査の結果、先行文との間に意味関係の上で conjoinability が存在することをゼロ照応成立の条件として挙げている。

(9)は、「水滸」の用例であるが、継続・非継続あるいは conjoinability の条件は満たし

ている一方で、視点の条件は排除されている、と考えられる例である。それに対し、その日本訳では、ふたつの条件をともに備えているとかがえられる。

(9) 王四₁ 馳書徑到山寨里, ϕ_1 見了三位頭領, ϕ_1 下了來書。朱武看了大喜。三個₂ 応允。

ϕ_1 隨即写封回書, ϕ_1 賞了王四₁ 五兩銀子, ϕ_1 喫了十来碗酒。王四₁ 下得山來, ϕ_1 正撞着時常送物事來的小喽喽, ……

(9-a) 王四₁ は手紙を携えて山寨へ行き, ϕ_1 三人の親分に会って ϕ_1 手紙をわたした。朱武はそれを見て大いに喜び, 三人₂ は招きに応じて, ϕ_1 すぐに返書を書き, ϕ_1 王四₁ に心づけとして銀子四五兩をあたえ, ϕ_1 酒を十杯ばかり飲んだ。王四₁ が山を降りて来ると, ϕ_1 いつも贈り物をとどけにくる山の手下にばったり出あったが, ……

(9)は王四を主題とし、時間の経過に従ってその動きを追って描写した文連続である。最初の場面「山へいき、親分衆に招待状を渡して歓待を受ける。」からつぎの場面、「山を降りると手下に出会う」に切り替わる箇所、すなわち場面の転換部分で、主題である王四が反復されている。これは日本訳でも同様である。これは「非継続文」の箇所で主題が反復されている、と理解される。同一場面内では主題の反復は見られない。

ゼロ照応については、第8句のゼロ主題は句中の動詞「喫」の行為主体である「王四」を指示するが、「王四」は前句の第7句で動詞「賞」の間接目的語であることから、異主語がゼロで示されていることになる。この部分は視点の条件に抵触するため日本語訳では、原文に忠実な訳((9-a)の~~~~)は不適格文となる。したがって、ゼロ主題を継続させるためには、たとえば駒田訳(平凡社『中国古典文学大系』第28巻 p.33)のように、前句の主語(三人の親分)をゼロで引き継いでその人物の立場からの動詞を対応させて、「(三人の親分は)酒をふるまった」と訳出することになる。このような操作により、日本語文では“三人とも……ふるまった”が主語が統一されることで同一視点からの記述となっている。これは中国語では conjoinability の条件が適用されているが、視点の条件は関与していない、とかがえられる。

2-1 受動句とゼロ照応

久野ではまた、談話の表層構造の成分によって、話者の共感度の差が存在し、共感度の高い順に主題、主語、目的語、その他があり、共感度の高いほどゼロ指示されやすい、としている。久野によると、談話中の人物の中で、最も共感度の低いのは、受動文の動作主体(対応する能動文の主語)である。したがって、視点論からすると、受動文の動作主体はゼロ主題化しにくい。ところが、中国語では(10)のように、ゼロ主題化されている例が少なからず見られる。

(10) 海闍黎₁ 知道是石秀, ϕ_1 那里敢争札故声? ϕ_1 被石秀₂ 都剝了衣裳, ϕ_1 赤条条不着一糸。

ϕ_1 肖肖去屈膝辺拔出刀來, ϕ_1 三四刀朔死了, ϕ_1 却把刀來放在頭陀身邊, …… (『水滸』)

(10-a) 海闍黎₁ は相手が石秀だとわかって, ϕ_1 もがくことも声をたてることもできず, ϕ_1 石秀₂ にすっかり着物を剝がれて, ϕ_1 一糸まともぬ素っ裸になった。 ϕ_1 そっと腰から短刀を抜きはなち, ϕ_1 三四回斬りつけて刺し殺した。 ϕ_1 そして短刀を頭陀の死体のかたわらに投げすて, ……

以下、「石秀」が部屋に帰り、寝につくまでの連続動作を表す6つの句がゼロ主題で続く。第1句から第4句までは「海閨黎」を主題とした連鎖である。第5句のゼロ主題は意味文脈からして「海閨黎」ではありえず、「石秀」でしかありえない。第5句からは、略題ではじまる「石秀」が新たな主題となって新たな連鎖に切り替わっている。第5句でゼロ主題となっている「石秀」は第3句の中で受動文の動作主体として用いられている。一方、日本文では、第5句のゼロ主語は「石秀」を指示できにくいであろう。吉川・清水訳（岩波文庫『水滸伝』）ではゼロ主語とし、駒田訳（平凡社『中国古典文学体系』第29巻）では異主題「石秀」は第5句において明示され、視点の切り替え操作がなされている。

作品中での人物の重要度からして「石秀」のほうが「海閨黎」より卓立が高いゆえに第5句でのゼロ表示が可能となる、ということも考えられる。しかし、同じく受動文の動作主体が略題で示されている(11)の例では、卓立が関与しているとは考えがたい。

(11) 誰知近日水月庵的智能, 私逃進城, ϕ_1 找至秦鐘家下看視秦鐘, ϕ_1 不意被秦業, 知覺, ϕ_1 將智能逐出, ϕ_1 將秦鐘打了一頓, 自己, 氣的老病發作, ϕ_1 三五日光景嗚呼死了。秦鐘本自怯弱, …… (『紅樓夢』)

(11-a) ところが近頃のこと, 水月庵の智能 $_1$ がこっそり寺から逃げ出して城内にはいりこみ, ϕ_1 秦鐘の家を捜しあてて見舞ったが, ϕ_1 うっかり秦業 $_2$ に氣どられてしまいました。 ϕ_1 智能を追い出し, ϕ_1 秦鐘をいやというほど打ったのですが, 自分 $_3$ も腹を立てたせいで持病が出て, ϕ_1 四, 五日とたたぬうちに哀れにも死んでしまいました。秦鐘はもともと虚弱なところへもってきて, ……

第4句のゼロ主題は第3句の受動文の動作主体「秦業」である。日本語では第4句のゼロ主題が「秦業」を指示することは構文上むずかしい。伊藤漱平訳（平凡社『中国古典文学体系』第44巻）のように「秦業」を主語として明示するか、あるいは松枝茂訳（岩波文庫『紅樓夢』）のように、さらに前の第3句を「秦業」を主格主語とする能動文にかえ、「秦業が気づいて……」としなければならない。

『水滸』などの旧白話小説には、このように共感度が最も低いとされる受動文の動作主体がゼロ主題となって後続句で用いられる例が少なからず見られる。視点の条件は制約とならない、と見るべきで、中国語では先行句に同一指示できる成分が存在すれば、それが先行詞となってゼロ照応が成立する自由度がかなり高いと言えよう。

2-2 異視点交錯の構造

中国語において視点条件が適用されにくいのは、二句間に限らず、より小さな単位の連語構造などにも同様の現象が見られる。関連する例を2, 3とりあげてみる。(12), (13)は主題主語について解説部分にふたつの動詞句が並列されている例である。

(12) 不明白的字就查字典, 問老師。(大河内 1982a,)

(12-a) わからない字は字典をひいたり, 先生にたずねたりする。

(13) 他是在祖母去世以後買來服侍祖父的。(巴金『家』)

(13-a) 彼女は祖母が死んだあと買われて来て祖父に仕えているのである。(飯塚朗訳, 岩波文庫)

(12)の日本語訳は中国語原文にほぼ対応するかたちの主題・解説文になっている。これに対

し、(13)の日本語ではふたつの動詞の一方について受動化(「買われて」)が加えられている。

(12)と(13)で日本語に違いがあらわれるのは、主題主語とふたつの述語動詞との格関係が同一であるかどうかにある。(12)では主題主語「(不明白的)字」は動詞「査(字典)」と「問(老師)」のどちらとも対格の関係にあるが、(13)では主題主語「他」は「買來」にたいしては対格、「服侍」にたいしては主格の関係にある、というようにふたつの動詞と異なった格関係で結ばれている。このため、視点を統一するために日本語訳では受動化がおこなわれている。

つぎの(14)、(15)は受動句においてふたつの動詞が連用されている例である。構文上ではそのどちらの動詞にも受動が及んでいると見られるが、意味上ではひとつの動詞にしか及んでいない。

(14) 我被他跑過來拉住。(橋本 1987)

(14-a) ?わたしは彼に走ってきてつかまえられた

(15) 我被他拉住不讓走。(同上)

(15-a) ?わたしは彼につかまえられて行かせなかった。

橋本の分析するように、(14)は「我被他拉住」と「他跑過來」とによって、また、(15)は「我被他拉住」と「他不讓我走」とによって構成され、「被」はどちらの場合も動作のひとつとしか関連をもたないのである。日本語ではこのような結びつきは許容されないため、訳文はどちらも自然な文とはならない。

「動詞+結果補語」構造にも併行した特徴が見られる。

(16) 李三推倒了椅子。

(16-a) 李三が椅子を押し倒した。

(16)はふつう上のように日本語訳されるが、その構造は「李三推椅子」と「椅子倒了」のふたつの命題が結合したもので、「推倒」は本来「他動詞+自動詞」による構成と理解される。日本語訳(16-a)中の「押し倒した」は「推倒了」が「椅子」を目的語にとって他動詞として機能している点に対応させたものである。「推倒」の構造に即した日本語訳を試みると、以下のように視点の衝突した文となる。

(16-b) *李三が椅子を押し倒れた

以上のように中国語では異なる視点に立ったふたつの動詞をひとつの表現として合一化できる。日本語に適用されるような視点の条件は制約とはなっていないと考えられるのである。

2-1 視点人物と談話主題

視点が一貫していれば、日本語ではゼロ主題が容易に出現する。たとえば先に挙げた(5-b)は使役化によって、また(6)は受動化によって視点を統一することでゼロ照応の連鎖を成立させた例である。

つぎの(17)は冒頭の談話主題のほかは、主題が一度もあらわれないが、中国語訳では主題がはるかに多く明示されている。

(17) 礼二₁の方は一昨年S大の経済を出て、 ϕ_1 自動車の部品を造る工場へ勤めて、 ϕ_1 会社の独身寮に入っている。 ϕ_1 そろそろ嫁を迎えて、一家を構えさせたいが、 ϕ_1 まだ学生っ気の脱けていないところがあって、 ϕ_1 結婚などということは微塵も考えていないら

しい。 ϕ_1 今までも一、二回嫁の話しを持ち込まれ、 ϕ_1 本人に何となく問合わせたこともあるが、 ϕ_1 手紙など読むのか読まないのか、 ϕ_1 返事などよこしたためしはない。

(井上靖『夜の声』)

- (17-a) 礼二_i 前年卒業于S大学経済系、 ϕ_1 現在製造汽車零件の工廠工作、 ϕ_1 住在公司的单身宿舍里。鏡史郎_j 是希望他不久就娶妻成家的、可他_i 還帶着幾分學生氣、 ϕ_1 好象絲毫也沒考慮過結婚這班事。以前也有人給提過一兩次親、鏡史郎_j 曾写信探過他本人的心意、 ϕ_1 也不知他_j 看了信沒有、 ϕ_1 根本就沒答復過。(文浩若等訳「夜の声」)

日本文では主題がゼロ表示されているが中国訳では明示されている箇所は文中にアンダーラインを付して示してある。逆に、日本語文では明示され、中国語文ではゼロ表示されている箇所は一つもない。

この一連の文は物語の主人公である「鏡史郎」の視点に立って、その息子「礼二」に関する記述がなされている。「礼二」は談話主題である。最も一般的に視点人物であるところの話者を指す一人称代名詞が、日本語では通常省略されるように、「鏡史郎」は一貫してゼロのままであり、「鏡史郎」の視点を示す表現(第4句の「一たい」、第7句の受け身形「もちこまれ」、最後句の「よこす」)が随所に用いられている。また、談話主題の「礼二」は冒頭に一度明示されるだけで、ゼロ表示が続き、主題連鎖が形成されている。

一方、中国語訳文を見ると、ゼロ主題は、いずれも先行句との同一主題である(第2、3句および第6句、第10句の「礼二」または「他」)。

また、日本語文ではゼロ主題で、中国語訳では明示されているものの内容は先行句とは異なる主語(第4句、8句の「鏡史郎」、第5句の「他(=礼二)」、第7句の「(有)人」)、および、埋め込まれた文中の主語で主文の主語とは異なるもの(第4句、9句の「他(=礼二)」)である。

中国語訳文が日本語原文と大きく異なるところとして、視点人物(鏡史郎)が明示されていること、談話主題(礼二)が同一指示されてゼロ表示される以外は代名詞「他」によって指示されていること、の2点が挙げられよう。この相違もまた、日本語では視点に依拠したゼロ表示が成立するのに対し、中国語ではこの規則が適用しにくいことをあらわしているといえよう。

おわりに

小論では後続句の異主題に関するゼロ照応が、中国語と日本語とではいかなる条件のもとに成立するか、対照的に検討を試みた。その結果、中国語では、先行詞と後続句の内容との意味関係、すなわち意味文脈に依存し、これに対し、日本語では、接続形式などによる文構造、および視点の条件が必須であるという点に大きな違いが見られた。さらに、これらの違いから、中国語では主題が一定するよりむしろ次々と変わり得て、日本語では同一主題が連続しやすい、という文つくりの傾向の違いが検証された。1-1節で検討したような日、中語で互に対応するかたちが最も広範にみられるゼロ照応ではあっても、その場合もまた、成立の根拠は、上の条件にもとめられる、と考えてよいであろう。

(註)

- 1) 後続句の主語の位置でゼロ表示されるのは主題(主題主語)である(陳 1987, 久野 1973, pp. 222)。小論では以下, これを「ゼロ主題」, 「主題のゼロ表示」などのように称する。
- 2) 中国文の引用例は, 原文で簡体字により表記されているものも, 小論では印刷の都合上すべて繁体字を用いている。
- 3) 大河内(1986), 藤堂(1985)など
- 4) 藤堂(1985) pp. 66-67
- 5) ここでは, 受動化の構造上の条件(動詞の前後に別の成分をもつ。受動文の主語が「定」)は満たしているが, 意味上の条件(不如意な内容)が不備なため受動化しにくい, と判断される。
- 6) 中国語の主題化の条件は: 主題化の対象が「定」または「総称」, 動詞の前後に付帯成分があること, とされる。L&T (1981), Tsao (1979), Shi (1989), 大河内 (1982a) など

主要参考文献

- 陳 平 1987 漢語零形回指的話語分析, 『中国語文』第5期, pp. 363-378
- 橋本萬太郎 1987 漢語被動式的歴史・区域發展, 『中国語文』第1期, pp. 36-49
- Huang, C-T James 1984 "On the Distribution and Reference of Empty Pronouns", *Linguistics Inquiry* Vol. 15 pp. 531-574
- 久野 暉 1973 「日本文法研究」, 大修館
 ———— 1978 「談話の文法」, 大修館
- Li, C. N. and Thompson, S. A. 1979 "Third-person Pronouns and Zero-anaphora in Chinese Discourse", *Syntax and Semantics* Vol. 12, pp 311-335
 ———— 1981 *Mandarin Chinese* (黄宣範訳『漢語語法』1983, 台北: 文鶴出版)
- 野田尚史 1986 複文における「は」と「が」の係り方, 『日本語学』2月号, 明治書院, pp. 31-43
- 大河内康憲 1982a 中国語構文論の基礎, 『講座日本語学』10, 明治書院, pp. 31-52
 ———— 1982b 中国語の受身, 『講座日本語学』10, 明治書院, pp. 319-332
 ———— 1986 中国語の文と句の連接, 『日本語学』10月号, 明治書院, pp. 67-75
- Shi, Dingxu (石定栩) 1989 "Topic Chain as a Syntactic category in Chinese", *Journal of Chinese Linguistics* Vol. 17, pp. 223-262
- 寺倉弘子 1986 談話における主題の省略について, 『言語』2月号, 大修館, pp. 98-105
- 藤堂明保 1985 『中国語概論』大修館
- Tsao, Feng-fu (曹逢甫) 1979 *A Functional Study of Topic in Chinese: The First Step Towards Discourse Analysis*, Student Book, Taipei